

令和 4 年 9 月 1 日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00083

研究課題名(和文) 米国キリスト教福音派による社会貢献運動: 貧困問題への取り組み

研究課題名(英文) Social Contribution Movement by Christian Evangelicals in the U.S.: Tackling the Problem of Poverty

研究代表者

堀内 一史 (HORIUCHI, Kazunobu)

麗澤大学・国際学部・特任教授

研究者番号：60306404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：米国キリスト教福音派は多様であり、終末思想に関わる救済観によって貧困観、貧困撲滅に対する関わり方は異なる。ジェリー・ファルウェルなどの原理主義および宗教右派やビリー・グレアムなどの新福音派は回心を重視し、個人的罪の贖いにより貧困から脱却できるという点で一致していたが、原理主義者のファルウェルは1970年代後半以降、貧困は自由主義経済により解決できると考えるようになった。一方、ロナルド・サイダーなどの福音派左派は回心による個人的罪の贖いを重視するとともに、社会改革による社会的罪の贖いも重視した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宗教右派などの宗教・政治の保守化に焦点を当てた研究が多くなされる中で、宗教的保守であっても政治的にはリベラルな福音派左派に関する研究はあまり研究者の関心を惹きつけて来なかった。しかし、オバマ政権樹立の背景には、若者層や無神論者のほか、福音派左派の存在が明らかになった。本研究の希少性に学問的意義がある。

また本研究は、福音派左派の成立の経緯および運動内容を記述することで、この運動が今後の米国社会や政治に及ぼす影響を読み解く一助となるという意味で、社会的・政治的意義を有する。

研究成果の概要(英文)：American Christian evangelicals are diverse and differ in their views of poverty and their involvement in poverty eradication depending on their view of salvation as it relates to eschatology. Fundamentalist and Religious Right such as Jerry Falwell and neo-evangelicals such as Billy Graham emphasized conversion and agreed that atonement for personal sins could lift people out of poverty, but since the late 1970s, the fundamentalist Falwell has believed that poverty can be solved by a liberal economy. On the other hand, evangelical left such as Ronald Sider emphasized the atonement of personal sins through conversion, as well as the atonement of social sins through social reform.

研究分野：宗教社会学

キーワード：キリスト教福音派 宗教右派 ジェリー・ファルウェル 新福音派 ビリー・グレアム 福音派左派
ロナルド・サイダー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後の米国社会における宗教と政治の再編を対象とした宗教社会学的研究は、ロバート・ウスナウ(Robert Wuthnow)による *The Restructuring of American Religion*, 1988.をもって嚆矢とされる。ウスナウは、米国においては、キリスト教諸教派が独自の神学と宗教実践を頼りに互いに競合し合いながら信者を獲得し教派を形成する教派主義が生滅し、神学・宗教実践ではなく、政治的イデオロギーに基づき諸教派が再編され、連合体を形成する方向へと移行していく過程を論じた。アメリカ社会がこのようにイデオロギー的に分裂していく状況を受けて、ジェイムズ・ダヴィソン・ハンター (James Davison Hunter) は 1991 年、*Culture Wars: The Struggle to Define America*. の中で、宗教的・文化的に多様化する米社会が宗教保守的な伝統主義 (orthodoxy) を認める立場とリベラルで世俗的な進歩主義 (progressivism) を認める立場に二分され、その亀裂が拡大して、家族、芸術、教育、法律、政治をも分裂させる「文化戦争(culture war)」を引き起こしていると主張し、文化戦争をキリスト教会の分裂と再編成の一因として捉えた。ウィリアム・マーティン(William Martin)は *With God on Our Side: The Rise of the Religious Right in America*, 1996. の中で、「文化戦争」パラダイムに立って、より具体的にウスナウが明らかにした宗教再編成、特に宗教右派運動および共和党との関係について論じている。

このような保守的政治・宗教運動形成の社会的背景に関しては、宗教社会学者のマーク・シブリー (Mark Shibley) が *Resurgent Evangelicals in the United States: Mapping Cultural Change Since 1970*, 1996. において南部の保守的福音派が南部以外の諸州、中でもカリフォルニア州へと移住することにより米国の宗教が南部化したことを実証的に記述している。歴史学においても、ドーチャック (Darren Dochuk) は *From Bible Belt to Sun Belt: Plain-Folk Religion, Grassroots Politics, and the Rise of Evangelical Conservatism*, 2011. の中で、砂嵐による耕作地の荒廃、軍需産業の興隆により保守的な南部福音派が南部諸州から西部諸州、取り分けカリフォルニア州へと流入し、その結果サンベルトをバイブルベルト化して米国政治が保守化したというのがドーチャックの主張である。

ロバート・ウスナウ、ジョン・エヴァンズ (John Evans) による *The Quiet Hand of God*, 2002 は、15 編の論文集であるが、リベラルな米国のキリスト教主流派の教会が歴史的に組織としてどのような社会貢献活動を展開してきたか、さらには、公共的な諸問題にどのように対処してきたかが記録されている。公共的問題としては、公民権運動以来の人種関係や環境問題、子どもをめぐる家庭問題や地域貢献などを扱っている。他方、ポール・デッカー (Paul Dekker), エリック・M・アスレイナー (Eric M. Uslaner) による *Social Capital and Participation in Everyday Life*, 2001 は、様々な国の宗教団体に関する研究論文を所収しているが、アスレイナーは、保守的な米国のキリスト教原理主義の教会を研究した論文“Volunteering and social capital”の中で、原理主義教会と非原理主義教会を比較して、原理主義教会が社会貢献やボランティアには消極的であると述べている。

こうした問題意識は、確かに、従来 of 終末論によって説明可能である。つまり、リベラル派はポスト・ミレニアリズムに立っており、従って、キリストの再来は千年王国到来の後であると捉え、千年王国は人間が実現しなければならないと信じるために現世改革意識が高

く、リベラルな政党と親和性がある。他方、プレ・ミレニアリズムに立つ保守的福音派は、キリストの再来は千年王国到来の前であるため、それに備えて信仰を深めるために伝統志向であり、現世改革意識を欠き、世俗社会との分離を望むとされる (George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 2006)。しかしながら、実証的研究がなされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、貧困問題を中心とする教会側の社会貢献活動において、保守的福音派とリベラルな福音派左派の教会が実際には、社会もしくは国際社会の貧困問題にどのように取り組んでいるかについて、現地調査を含めて実証的に検証することであった。しかしながら、2019年度はのぞき、コロナ禍のために20年度以降の現地調査はできず、専ら文献調査となった。

3. 研究の方法

計画段階では、たとえば World Vision などの国際救援団体 NGO、Eastern University などの大学、神学校に設置されている救援団体、そして教会による日常的な支援活動を現地視察する予定であったが、前述のようにコロナ禍により渡航が不可となったため実証研究から文献研究に切り替え、リベラル派、保守的福音派、福音派左派、原理主義者に分類し、代表的人物の神学思想、特に、終末論に光りをあて、社会的関心および貧困問題をどのように捉えているかという点を明らかにすることとした。

4. 研究成果

『麗澤大学紀要』第105巻に「『汝らのうちにまずしきものなからん』: 米国キリスト教福音派の社会的関心および貧困観に関する基礎的研究」(2022年3月)を発表した。その内容は下記の通りである。

本研究は、リベラルな教会は社会的関心が高く、保守的な教会は低いという仮説から出発し、福音派の「社会的関心」および「貧困」に関する思想を検討した。神学的傾向と社会的関心との関係は、仮説ほど単純ではなく、保守・リベラルといった神学的立場と政治的利害によって多様であることが分かった。

文献調査で検討したのは、福音派、原理主義者、福音派左派の3つのグループであるが、これらの特徴を浮き彫りにすべく、リベラル派を分析に加え、各グループを代表する、ピリー・グレアム、ジェリー・ファルウェル、ロナルド・サイダー、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアの思想を比較検討して、それぞれの社会的関心および貧困観と貧困問題の解決方について明らかにした。

グレアムは、分離主義的原理主義から決別した新福音派(後の福音派)に属し、福音伝道という高い社会的関心を有していた。しかも、米国のみならず欧州や中南米、アフリカ諸国でも伝道集会を開催し、政党に関わらず歴代大統領の精神的指導者としても活躍した。70年代にグレアムが福音派というブランドを創ったと言ってもよいだろう。だが、キリストの再臨が千年王国の到来の前に実現するとするプレ・ミレニアリズムの信仰に加えて、個人的罪の告白と悔い改めに基づく回心を重視したグレアムは、キング等リベラル派による公民権運動への参加を控え、積極参加をしたリベラル派には批判的であった。貧困に関してグレアムは、福音伝道による回心を重んじ、かつその限界は感じていたものの、社会的罪の認識や

旧約聖書の預言者的発想は持たなかった。ジョンソン政権の「貧困との戦争」に関しては、一時期を除いて、基本的には賛同していない。貧困問題などの問題の解決は、人間が行うものではなく、神が千年王国を建設すればすべての問題は解消すると考えたからであった。

福音派左派のロナルド・サイダーは、社会的関心は極めて高く、グレアムのように個人的罪を認めると同時に、キング等リベラル派が認めた社会構造に埋め込まれた罪をも認識していた。従って、サイダーは、旧約聖書の預言者的伝統に立った社会改革の必要性を受入れ、人種隔離政策を批判し、公民権運動に参加し、さらには、米国内外の貧困問題を米国社会全体の問題として捉え直し、キリスト教徒によるシンプルなライフスタイルを推奨した。一方、諸個人の思考や行動変容が要求される社会変容を惹起するためには、全人格を改変させるインパクトを持つ悔い改めと回心の必要性を感じたサイダーは、社会変革のみを重視するリベラル派を批判しつつ、同時に、社会的関心と福音伝道の両立を主張した。

世俗社会との関係を絶つ分離主義的原理主義者であったファルウェルは、回心を重んじ、ディスペンセーション主義的プレ・ミレニアリズム(旧約・新約聖書の歴史観に基づき世界史を7つの区分に分類し現代を千年王国の前の区分としキリストの再臨は迫っており信仰の深まりを強調する終末観にたつ神学思想)に立って、原理主義者を対象とした福音伝道や回心を重んじた。しかし、1976年以降、社会的関心は急激に高まり、政治に積極的に介入した。言い換えれば、米国社会の過激なリベラル化、社会の道徳的退廃への危機が臨海状況に達していると感じた原理主義者は、分離主義や回心中心主義を捨て、主に原理主義者や保守的福音派からなるモラル・マジョリティを結成し、宗教右派グループを牽引し、大統領の選出に向けニューライトの政治家たちと協力したのである。ファルウェルの社会的関心の対象は、主に人工妊娠中絶の禁止、公立学校での祈りの復活などの社会道徳的問題であり、貧困に関しては、資本主義体制による自由主義経済の発展に依存した。分離主義放棄後も自らを福音派ではなく原理主義者と呼び続け、1989年の団体解散後も「闘争心」は健在であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 堀内一史	4. 巻 105
2. 論文標題 「汝らのうちに貧しきものなからん」：米国キリスト教福音派の社会的関心および貧困観に関する基礎的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 麗澤大学紀要	6. 最初と最後の頁 49, 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

特記事項なし

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------